

誰もが心を通わす暮らしやすいまちへ

もっと 知りたい

心のバリアフリーのこと



もっと知りたい。心のバリアフリーのこと

2020年11月

発行 : 墨田区福祉保健部障害者福祉課

制作協力 : 有限会社モアナ企画
編集 : ひらがなネット株式会社
写真 : 先浜恵理子(unison) (表紙~11頁、一部除く)
デザイン : イワサキデザイン

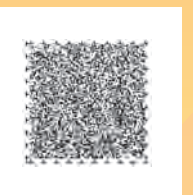


特集 ①

すみだの取り組みから知る
“心のバリアフリー”

特集 ②

新型コロナでわかったこと



誰もが心を通わす 暮らしやすいまちへ

墨田区では、誰もが互いに個性を尊重し合いながら
共に生きる社会を目指しています。

この思いをさらに広げるため、「心のバリアフリー※」事業をすすめています。

当事者、家族、支える人、関わる人、さまざまな人々が交流する「場」。

そこで行われる取り組みを、関わる人々の声とともに紹介します。

それぞれが特別な、閉ざされた場所ではなく、社会とつながっていることを
区民のみなさんに知っていただく手がかりになればと考えます。

※「心のバリアフリー」とは、さまざまな心身の特性や考え方を持つすべての人々が、
相互に理解を深めようとコミュニケーションをとり、支えあうことです。
(「ユニバーサルデザイン2020 行動計画(2017年2月ユニバーサルデザイン 2020 関係閣僚会議決定)」より)

もくじ

特集1 すみだの取り組みから知る“心のバリアフリー”

- ・ 交流が生まれる場所 P 3-7
- ・ すべての人に読書の喜びを届ける場所 P 8-9
- ・ 新しい価値観を生む場所 P10-11
- ・ 安心してがん検診が受けられる場所 P12-13

特集2 新型コロナで、わかったこと P14-15

特集 1

すみだの取り組みから知る “心のバリアフリー”

仕事をする、本を楽しむ、新たな情報を手に入れる、
検診で健康をチェックする。日常の営みが
少しずつ便利に、人にやさしくなっています。
誰もが活躍できる、暮らしやすいまちへ。
すみだの取り組みをご紹介します。



“SKY WAGON”

スカイワゴン

交流が生まれる場所

「こんにちは!」「ありがとうございます」
毎週火曜日と木曜日に、墨田区役所1階に
元気な声が聞こえます。

空色の「スカイワゴン」が開店しているからです。
パンやお菓子、雑貨類など、豊富な種類がそろっています。
今年で10年目を迎え、たくさんのファンを獲得しています。



◎「スカイワゴンの名前の由来は？」
「大空のように広く、青空のように明るく、澄んだ
心の持ち主たちが心をこめて手作りを販売する
お店」という意味が込められています。



◎スカイワゴンってなに？

墨田区の福祉作業所等に通う障害のある方の手作りの品物を販売しています。福祉作業所等で作られた商品を一度に見ることができ、購入できるのが魅力です。

週に2回の開店ですが「スカイワゴンができて、定期的にお買えるようになってうれしい」という声もあります。入学時期やクリスマス、バレンタインなどは、プレゼント購入する人が多いそうです。

◎販売はみんな交替で担当

墨田区福祉作業所等ネットワーク《Kai》に入っている施設が交代で担当します。施設の利用者が販売と接客体験をすることで、あいさつや笑顔の大切さを学んだり、働く喜びを感じたりします。(2020年10月現在は新型コロナウイルス感染予防のため、利用者が店頭に出ない場合もあります)

◎人気のパン「ベスト5」はこれ!

1. カレーパン
2. ソーセージパン
3. コロッケパン
4. チョココロネ
5. 焼きそばパン



常時20種類以上のパンを用意しますが、お昼過ぎにはほとんど完売します。



お客様の声

★おいしくて、値段も手ごろなので、見つけたとついたらたくさん買います。一生懸命作業しているのを知っているので、応援の気持ちもあります。

★区役所に用事で来て、お昼だからちょうどいいと思って購入しました。初めてだけど、便利です。

★庁舎に勤めているので定期的に購入します。総菜パン2個と甘めのパン1個が、定番の買い方です。

★かわいいマスクがあったので買いました。ワゴンにたくさんの商品があって、ワクワクします。

学童の子どもたちから 手紙が届きました。

★夏休みの学童クラブの昼食に、パンをまとめて購入しました。地域の物にふれ、障害者支援について伝えるためですが、お弁当を作るお母さんたちに休息してもらおう目的もありました。子どもたちからのおいしいパンの感想や、質問を書いた手紙をお届けにきました。



東駒形コミュニティ会館学童クラブの
斎藤さん(左)と郷さん(右)



子どもたちの
手紙

SKY WAGON Staff Interview



菊池さん(左)と伊藤さん(右)

●墨田区肢体不自由児者父母の会 菊池 昌子さん

親子で手作りの品物を販売しています。子どもたちはシールを貼ったり、袋に入れたり簡単な作業をします。売れ筋の商品は、マスクやタオルエプロンやコースター、バッグなどです。1か月売れないものは引きあげます。新しい商品を待っているファンの方がいるからです。



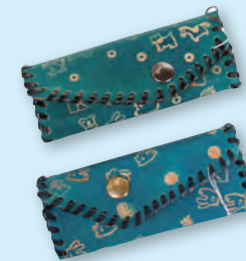
●空ゆけ未来工房 中尾 比呂美さん

ハンバーガーとおせんべいを販売しています。利用者さんたちは施設外での仕事は格別に楽しいようで、スカイワゴンでの販売を希望する人が多いです。みなさん地元ですから、知り合いの方が通ると声をかけてくれます。ニコニコしてとてもいい表情で応えています。

SKY WAGONの商品の一部



すみだふれあいセンター福祉作業所:
スタンプを押したポチ袋



はばたき福祉園:キーケース



隅田作業所:隅田屋のあげもち



おいてけ堀かっぱ堂:
おいてけ堀かっぱ堂クッキー



はあとぴーす:ご祝儀袋



NPOのそみ 肢体不自由児者通所訓練所:
感覚刺激のヘアゴム

《スカイワゴンの開店日》

◎毎週火曜日と木曜日 ◎10:00~15:00(2020年10月現在は時短営業です) ◎区役所1階エスカレーター横

墨田さんさん
プラザ

就労継続支援 B 型

おいしいパンができる場所

パン作りを始めて 17 年
スカイワゴンの人気商品になりました

墨田さんさんプラザは、障害のある方の働く場として 60 名の利用者がいます。一人ひとりの個性や適性を生かし、可能性を最大限に引き出す取り組みを行っています。自主生産品にも力を入れていて、手作りパンとお菓子の製造販売はスタートから 17 年が過ぎました。おいしいと評判のパンは地域のみなさんに広く知られ、多くの日は完売します。

特別なパンではないけれど
ていねいに作っています

「パン職人から直接学んで、パンの作り方を覚えました。40 種類のパンを作っています。新作や季節限定のパンは少なめにしています。同じパンを作り続けることで、作業の流れや材料の種類などを覚えてもらえます」と、施設長の大谷徹さん。17 年もパンの製造を担当している利用者もいて、とてもていねいに仕事をしています。



施設長 大谷さん

作る、仕込む、掃除をする

働く時間は 9 時～ 15 時です。午前中はその日のパンを作って、午後は翌日の仕込みをします。その後は、みんなで一緒に掃除です。作業台も床もとてもきれいです。道具類も整然と使いやすいように並んでいます。

パン作りは楽しいから
長く続けられます

自宅から 30 分以上かけて徒歩で通う古川祐治さん。パン作りは立ち仕事ですが、往復歩くので体力が付き疲れないそうです。パンは大好きですが、食べるのは週末だけです。ダイエットをかねて、朝はバナナ 1 本だけです。なんと、10 キロやせたそうです。

「好きな工程は成型で、特にソーセージパンの成型が好きです。いい仲間と働いているので、毎日楽しい」と話します。



古川さん

ひだまり
工房

就労継続支援 B 型

人気の商品 が生まれる場所

各自の得意分野を活かして
ハンドメイド雑貨の製作・販売を
しています

陽当たりのいい部屋で、利用者みなさんがそれぞれの作業をしています。編み物をする人、ミシンをかける人、手縫いをする人、布を折る人など、仕事はとてもていねいです。よりよい商品づくりを目指してみんなで相談して生まれた商品は、100 種類くらいあるそうです。いまは 20 ～ 30 種類に絞っています。

大人気のマスクの製作担当は 9 人

マスクは新型コロナウイルス感染拡大の前から商品化し、スカイワゴンや雑貨店、薬局などに卸していて、とてもよく売れています。布を切って、サイズどおりに折り、ミシンをかける。そしてアイロンをかけて、またミシンをかけ、耳にかけると通すなど、いくつもの工程があります。9 人の利用者が関わりながら人気のマスクが出来上ります。

マスク作りは楽しいし
やりがいがあります

ミシン担当のお二人は、マスク以外のお薬手帳ケースやポーチなど、いろいろなものを作ります。「ミシンはここで覚えました。お金をためて家のミ

すみだの取り組みから知る
特集 1 “心のバリアフリー”



精神保健福祉士の
高橋さん

シンを買い、小物を作ったりしています。この間は母にエコバッグを作ってあげました」と話してくれました。「手作りは楽しいです。マスク作りは、やりがいがあります」

人と、社会と、つながる場が
生活の潤いになれば

精神保健福祉士である職員の高橋知佐さんは「登録されている利用者は 30 名くらいですが、1 日に 10 名前後の方が来て作業をしています。ご自身のペースに合わせて週 1 回の人もいれば、毎日通所する方もいます。みなさんとてもまじめに、コツコツ作業をしています。新しいことは苦手だったりしますが、マスクなどはいつの間にか自分たちで工夫をして作業をしています。趣味で作っているのではなく、商品だということに社会との接点が生まれています。こうした場があるのは、生活の潤いになるのではないかと考えています」

ひきふね図書館

すべての人に読書の喜び を届ける場所



まだまだ知られていない 図書館サービス

読書の楽しみは、知識を広げたり、心を癒したり、豊かな人生を歩む手助けになります。図書館はそうした本と出合える場所です。

ご存知ですか？ 墨田区の図書館は1976年から障害者サービスを始めていることを。これは全国でも相当早く、先進的な取り組みとして高く評価されています。こうした図書館のサービスや取り組みをあらためて知っていただくため、墨田区の障害者サービスの立ち上げから携わってきた元墨田区職員の内山さんに、お話を伺いました。

「私たちは『図書館利用に障害がある方へのサービス』と、とらえています。一人ひとりが利用できない、読めないという状況は、利用者側の障害ではなく図書館側の障害なのだという考え方です。今では当たり前の考え方ですが、当時としたら先駆けだったと思います。だれでも足を骨折して入院したら、図書館へ行くことができなくなります。実はすべての人が図書館利用の障害になる可能性を持っています。けっして特別な人へのサービスというわけではありません」

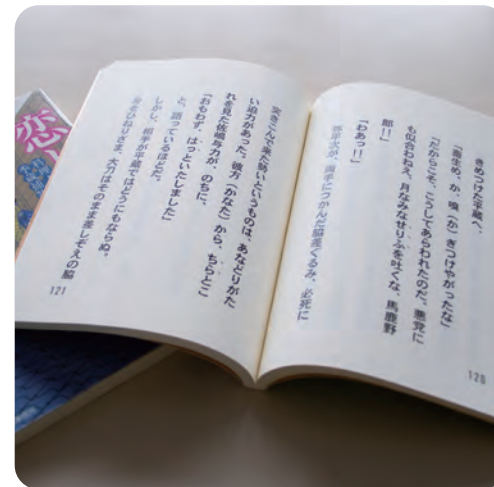
44年前に始めたときは、①図書館まで来られない方にはその方のところまで資料を届けよう。②視覚障害のある方が利用できる資料を用意しよう。

「利用者の一人ひとりの要望に応えていくのが、図書館の役割だと思っています」と山内さん。



山内さん(左) と太田さん(右)

この2つから始めたそうです。時代の流れとともに、録音資料(デジター図書)からマルチメディアデジター図書、電子図書などの新たな資料が登場しています。読むことに障害のあるさまざまな方たちに、さらに利用される可能性が広がっています。



上)『鬼平犯科帳』の拡大写本。小さい文字が読みづらい人のための本で、文字を読みやすい大きさに書き直しています。下左) 布の絵本。ボランティアが制作しています。下右) 墨田区のお知らせ「すみだ」も点字版があります。

誰もが使える図書館として 障害者サービスを考えたい

最近ではディスレクシア(読字障害・読み書き障害)などの発達障害が、社会に認知されるようになりました。本を読むのが苦手、指で文字をなぞらないとうまく読めないなど、生まれつきの障害のために読むことが難しい子どもたちが本を読む方法のひとつとして、マルチメディアデジター図書があります。パソコンやiPadの画面に文字が出てきて、文字を読んだ音声や画像も出てくる本です。読む速度や文字の大きさや色を変えることができ、自分のペースで自力で読書を行うことができます。

「子どもたちの障害はさまざまで、同じではありません。一人ひとり個性があり、読みたいジャンルや必要とする支援も違います。個々の子どもにあった読書の方法を、本人と相談しながら一緒に探っていきますので、図書館の受付でお気軽にご相談



本や雑誌をCDに録音したデジター図書



マルチメディアデジター図書は、テキスト・音声・画像の3つが同期しています。



録音室で音訳作業中のボランティア

ください。読むことが苦手な子どもに、一人でも多くマルチメディアデジター図書など様々な本にふれて、読書の楽しみを感じていただきたいです」と、ひきふね図書館職員の太田千亜生さんは話します。

実際にマルチメディアデジター図書を体験した子どもたちは、とても集中し表情が豊かになったそうです。ひきふね図書館では、ボランティアの皆さんとマルチメディアデジター図書の制作を手掛けています。



「誰もが使える図書館を目指したい」と太田さん。

ミライロハウス TOKYO

新しい価値観を 生む場所



みんなが使いやすい製品を扱う 体験型のショールーム

「ミライロハウス TOKYO」(株式会社ミライロ)は、障害のある方と企業をつなぐ場所です。店内にはユニバーサルデザイン※の商品が多数並べられています。例えば、車いすの着脱式電動アシスト機や、音の間こえづらさを解消するスピーカーなど、実際にここで体験することができます。企業がよい製品を作っても必要とする方にまで届きづらい状況にありました。一方、障害のある方にとっては、情報を得たり体験できる場所がほとんどありませんでした。丸井錦糸町店の中にあるので、どなたでも気軽に立ち寄ることができます。

ふれる、つながる、学ぶ、創る 情報発信と交流の拠点でもあります

ここでは交流会や相談会、イベントなども行っています。2020年の7月1日にオープンしたばかりですが、多様な視点を見つけられるセミナーが毎月行われています。「靴下の試着体験会」「点字を学ぶ講座」「各種セミナー」など、気負うことなく学ぶことができます。

ミライロハウスから 新しいものを生み出していきたい

「誰にとっても使いやすい製品やサービスを、ここから送り出したいです。そのために、障害のある方をはじめ、企業の開発担当者やエンジニアなど、多彩な人が集まり意見交換をする場を作っていきます。ユニバーサルデザインといったらミライロハウス、といわれることが目標です」と株式会社ミライロの森田啓さん。一人ひとりのライフスタイルを快適にしていく。そのきっかけは、いつでもここで開かれています。



「福祉機器をいつでも見に来ていただけます。これは一つの価値だと思います」と森田さん。

※ユニバーサルデザイン：年齢や障害の有無、体格、性別、国籍などに関係なく「すべての人のためのデザイン」を意味します。



障害のある当事者の意見は貴重です。岩田さん(右)は接客だけでなく、幅広く活躍しています。

いろいろな人と出会える接客が とても楽しいです

「来客された方への商品説明やボッチャ体験、車いす体験のサポートなどを行っています」
大学3年生の岩田完治さんは、週に1~2回ミライロハウスでアルバイトをしています。通勤は電車で1時間ほど。高校生のころから車いすで電車通学をしているので、特に苦労することはないそうです。

岩田さんは2歳半の検診で先天性脳性麻痺と診断されました。杖を使った時期もありましたが、将来を見据えて車いすを選択し、10年以上になります。

みんなが対等の 社会になってほしい

「障害者と健常者が分けられているように思います。健常者の方が、障害者だからやってあげなきゃいけない。と思うことに対して、障害者も気づくんです。そこが嫌だと思っていた。障害者だからやってあげるのではなく、困っているから助けて。そういう社会になることが夢です」

社会福祉を勉強している岩田さんは、友人たち



店内には福祉に関する本や機器、ユニバーサルデザインの商品が並んでいます。点字に触れるきっかけがあったり、芝生や坂道などでも車いすを快適に動かせるパワーアシストを試すことができます。



「障害に関わらず意見交換のできる場」というサークルの代表をしている岩田さん。楽しい企画を思案中です。

の優しさに驚いたといいます。階段のある場所でも「完治と一緒にいきたいから」と当たり前のように車いすを上げてくれます。これが対等の関係ではないかと思っています。

ユニバーサルデザインは 生活が豊かになります

接客をしていて印象的なことがありました。
「ユニバーサルデザインを扱うこうした場所があるのはいいですね。と、健常者のお客さんから言われたことが、とても新鮮でした。障害者や高齢者が使いやすいものは、誰にでも使いやすいです。生活を豊かにしてくれるユニバーサルデザインは、どんどん広がっていると思います」



「e- 検査ナビ」を使った胃部 X 線検査

聴覚障害のある方が 安心してがん検診を 受けられる場所

聴覚障害のある方が安心して がん検診を受けられる場所

日本は世界一の長寿国ですが、年間約37万人ががんで亡くなっています。死因第1位のがんも早期発見・早期治療で、生存率が9割以上に高まるため、定期的に検診を受けることが大切です。

しかし、「わかっているけれど…」さまざまな理由で、がん検診の受診率は低いのが実情です。特にがん検診の中でも、胃がん検診（バリウム検査）は医師や診療放射線技師の指示のもとに受診者が動かなければならないため、ハードルの高い検診です。そのため、たとえば聴覚障害のある方や耳の不自由な高齢者、日本語力が十分でない外国人の場合は、検査中の指示が聞こえない、理解ができないなどの理由で検診を受けない人が多いそうです。また、検査を受けたとしても、十分な質が保てないことも問題でした。こうした課題に対し開発された、胃部 X 線検査支援システム『e- 検査ナビ』を紹介します。検査の指示内容を文字だけでなく、イラストやアニメーションで見られ、誰にでもわかりやすく伝えることができます。

「胃がん検診は、胃の中にバリウムを流し、胃壁全体に付着させて鮮明な画像を撮れるようにしま

す。“手すりを内側から握ってください”“おなかを膨らませてください”“げっぷを我慢してください”など、細かい指示を次々に行います。質の高い検診を行うためには、スムーズなコミュニケーションは欠かせません。この『e- 検査ナビ』はとてよくできています」と、公益財団法人東京都予防医学協会の峯岸純一さん（診療放射線技師）は話します。導入した施設では効果をあげているそうです。この『e- 検査ナビ』があれば、聴覚障害のある方も、安心して受診できます。



『e- 検査ナビ』を開発した株式会社アイエスゲートの宮田さん（左）と、システムを導入している公益財団法人 東京都予防医学協会の峯岸さん（右）。



上) 検査室の中にも液晶モニターがあります。下) 指示を出す診療放射線技師と受診者はモニターで同じ映像を見て確認しています。



検査する人は液晶モニターで指示を出します。受診者はゴーグルタイプのモニターを通して、指示のイラストを見ることができます。

定期的ながん検診により 誰もが健康不安のない毎日を

この『e- 検査ナビ』を開発した株式会社アイエスゲートは、墨田区内のソフトウェア会社です。

「創業以来、聴覚障害者や外国人の方々向け支援システムの開発を行っています。私は診療放射線技師として病院で約21年間、さまざまな検査に従事していました。私自身、20歳で左の聴力を失っていることから、病院勤務のかたわら大学院で X 線検査における聴覚障害者支援研究を行っていました。医療の現場と福祉工学、そしてアイエスゲートの歴史ある開発技術を生かして作り出されたのが『e- 検査ナビ』です」と宮田充さんは話します。

検診を受ける方は、液晶モニターやゴーグルタイプのモニターを通して指示が確認できます。うつ伏せや横向きになっても指示の内容が見えますので、とても安心です。実際の胃がん検診がどのように行われるかを、手話付きの動画（YouTube）で前もって見るすることができます。

墨田区では2020年度から、この『e- 検査ナビ』による胃がん検診が受けられるようになりました。

年に数回、『e- 検査ナビ』を導入した検診車での受診が可能です。また、手話通訳の方も同席し、モニターを使い、文字やイラストで事前に説明も行いますので、安心して受診することができます。



「受診率の向上と精度の高い検査の実施に寄与したい、という思いで開発しました」と宮田さん。



墨田区実施の検診について、詳しくは、区のホームページをご覧ください。

動画を見てから胃がん検診（バリウム検査）を受けましょう

初めての方も安心!胃がん検診の流れ（字幕手話付き動画）



新型コロナで、わかったこと。

新型コロナウイルスの影響で、通常の運営・営業ができなかった施設や企業の方にアンケートをお願いしました。次につなげるための課題やヒントが見えてきます。

新しい可能性へのチャンス

● 有限会社さいとう工房 代表取締役 齋藤 省さん

歩いて出勤できる社員以外は休業にしました。また、新入社員2名が最初から休業となりました。電動車いすの部品が届かず製作が止まったり、海外に贈った中古車いすがインドで2か月輸送が止まり、費用がさらにかかるなど、コロナ禍でさまざまな計画が大幅に変更になりました。車いすの調整や納品などで病院や学校、施設に行くことが制限され、不自由だった方もいたのではないかと思います。社内でもテレワークや時差出勤などの対応で、コミュニケーションが取りにくくなりましたが、こうした新型コロナの試練も、新しい可能性を引き出したり、次へのステップに行くためのチャンスだと思い、取り組んでいきたいと思っています。



営業してくれて、ありがとう

● 御谷湯 店主 伊藤 林さん

銭湯のほかに、介護が必要な方と家族が入れる福祉型家族風呂があります。緊急事態宣言のときはどちらも営業時間を変更し、イベント（ニコニコ入浴・湯処語り亭）やマッサージを中止。浴場組合の感染対策ガイドラインを遵守しています。お客さまにも変化がありました。外国人や遠方の高齢者の激減と、福祉型家族風呂の利用者も減り、若い方が微増でした。印象に残っているのは「営業してくれてありがとう」「無理しないで頑張ってください」と言われたこと。一方、安心・安全の考え方の違いも感じました。今後も状況に応じた安全・安心を確保する営業ガイドラインを作り、実施していきたいと思っています。



会うことの大切さに気付いた

● 就労継続支援事業所 カラコネオフィス 代表 ボーン・クロイドさん

「早く通所したい。普段と同じ生活がしたい」と利用者からの声が多く上がったのが印象的でした。障害者施設としては、不安なときこそ利用者とリアルに顔を合わせて話を聞く大切さに、あらためて気づかされました。普段からインフルエンザ対策として『いちにちひとふき除菌』活動を行っていました。『正しく恐れ』『過剰に恐れない』対応方法をみんなで共有しました。感染症以外にも大きな災害の発生も考えられるので、油断することなく準備をし、非常事態が発生してもできるだけ早期に事業所の日常を取り戻す努力をしていきます。



緊張の続く職員のケアも重要

● 放課後等 デイサービス キッズサポートりま 施設長 佐々木 義勝さん

この施設に通う児童のほとんどは基礎疾患を有していることもあり、利用児童の家族からは「自分たちや子どもが感染源になりたくない」という声が少ないからありました。新型コロナウイルス自体への不安より、休校といった具体的措置へのインパクトが利用者側に大きいと感じています。医療的ケアの必要な子どもたちが通所しているため、以前から衛生管理には力点を置いていましたが、在庫確保の重要性を実感。また連日の緊張で、職員の疲労、ストレスを今年ほど強く感じたことはありません。職員の心理的ケアの方法を考えていきたいです。



日ごろから複数の連絡手段を確認

● 墨田区手話通訳等派遣事務所 主任 江澤 千恵子さん

緊急事態宣言中も窓口開設は継続していました。手話を第一言語とする聴覚障害者にとって、手話と同時に口の形や表情を読むことは大事な情報です。手話通訳者もマスクをしなくてはならない状況に戸惑いましたが、徐々に慣れてきました。高齢の聴覚障害者の中には情報を正しく理解できない方もいて、複数の連絡手段を平常時から用意し、確認や練習をしておく必要があると感じています。つながりのない方たちにどのように働きかけができるか考えていきたいです。

